

寺田寅彦先生の英語

寺田先生から見ると孫弟子の1人に過ぎない筆者が、先生の英語について今さら云々しようとは烏滸がましい話で、自らの浅学を省みない愚拳と嗤われそうである。多少の弁明の意味をこめて、こんなことを思いついた動機を初めに記すことにする。それは先生と直接に関係があるわけではない。

松本清張に「文豪」という作品がある。坪内逍遙を扱っていて、清張自身と思われる主人公がふとした経緯から逍遙の死は自殺ではないかと推理する筋立てになっている。その推理の当否はどうでもよいのだが、筆者が気にしたのは、逍遙は1つの紙包みだか封筒だかを残して、そこに「Don't break this until I have passed away. (私が死ぬまで、これを破るな)」という英文が記されていたという、清張の文章である。逍遙ともあろう人が本当にこのように稚拙な英文を書いたのか、ちょっと信じられなかったが、清張がこういう資料関連でデッチ上げをするとも思えないので事実なのであろう。

この英文では、まず break がいけない。this が package とか envelope を指しているとする open とすべきである(ただし this が seal つまり封印を指しているなら可)。次に問題になるのは have passed という現在完了の使用である。逍遙がこれを書いた時点ではもちろん彼は生きていて未来に属することではあるが、ここは未来形でもなく pass away と現在形で書く必要がある。動詞や時制の誤用を直してみても、全体としてコナレた英文という印象からは遠い。高校生や大学生ならともかく、シェイクスピアの翻訳などで余りにも有名なあの逍遙なら、せめて No opening during my lifetime. くらいが相応しかったような気がする。

明治時代に教育を受けた人たちは、外国語を通して文化を吸収する必要性が現在とは比較にならないほど高かったから、外国語の読

解力はもちろん表現力も平均してかなり高かったはずというのが、従来の筆者の印象であった。事実、逍遙とほぼ同時代を生きた新渡戸稲造の有名な「Bushido」を読むと、さすが日露戦争の頃にセオドル・ルーズベルト大統領を感動させたというだけあって、格調の高い見事な英文で書かれている。新渡戸の場合、米国留学などを含め若い時代に英語によって表現しなければならぬ機会が多かったのに対し、逍遙の場合、そういう機会にほとんど恵まれなかったようである。そんなこともあって、「寺田先生の書いた英語は、ケンブリッジ・オクスフォードの卒業生なみだそうだ」というような話を学生時代から聞かされてきた筆者は、一度その“神話”を自分で確かめてみたくなったのである。

先生は多くの外国語に堪能であったことは、よく知られている。フランス語・ドイツ語・イタリア語・ロシア語の他に、ラテン語・ギリシャ語・中国語・ペルシャ語・サンスクリットまでも理解の範疇に含まれていたそうであるから、不勉強な筆者などただただ恐れ入るばかりである。しかし、中でも英語は先生にとって別格だったことは疑いない。先生の学術論文は Scientific Papers という全6巻の叢書のかたちにとめられていて、そのうち5巻までが欧文論文、その200を超す欧文論文は数編のドイツ語を除くと全て英語である。その多くの英文論文から、適宜に次の3編を選んで精読させていただいた。

初期(1904年)のものとして「On the Capillary Ripple on Mercury Produced by a Jet Tube」、中期(1922年)のものとして「On Periodic Fluctuations of Convection Currents — with a Hint on the Origin of Sun-Spots Cycle」、後期(1930年)のものとして「On Luminous Phenomena Accompanying Earthquakes」の3編である。何れも先生単名の

論文である。中期や後期になると、研究室門下生との共著論文が当然に多くなるが、敢えて単名の論文だけを選んだ。門下生との連名の場合でも、先生が責任をもって推敲されたはずではあるが、筆者の経験から言って、下書きをなるべく生かしたいという気持ちが働くことは避けられないから、先生ご自身の英語表現力を味わうには単名論文に如かずと判断したわけである。

初期の論文は、先生が東大物理学科を卒業した翌年の講師になった年に発表されているので、大学院時代の研究であろうか。先生が25・6歳の頃である。同じ頃の筆者自身の英語表現力を思い出すと、雲泥の違いがあることを自覚せざるを得ない。現在の若い人たちが英文論文を書くときには、たいてい同種の論文がすでに多数あるので、その辺から適当にツギ合わせた「英借文」になってしまうことが多いが、そういうゴコちなさは微塵も感じられず、まことに流麗な英文である。数式に頼らず現象を定性的に説明する部分の多い内容であって、これは表現力がよほど高くないと難しい。強いて筆者が気にかかったところといえば、「The supply is adjusted by a cock.」というところは「The supply is controlled with a cock.」の方が良いのではないかとということ、用いられている第一人称の単数と複数混用の混用が1か所で見られたくらいである。

中期や後期の論文ではますます“手慣れた”感じの英語になっている。こここそがそれと大向こうをウナらせるような名文の例を挙げるとよいのだが、それほど都合のよい例は見つけにくい。しかし、論文のどこにも英文としての抵抗感がなく自然に内容が伝わってくる。実は科学論文に関してはこれが最も大切な点であって、文学作品のように凝った表現はむしろ有害無益と言える。現代のように何ごとでもセセコマシイ時代では、科学論文もなるべく短くすることが要求されるので、現在ならカットされてしまいそうなことから、悠々と楽しみながら書いておられる先生の情景が行間に想像されて微笑ましかった。

寺田先生は、幕末生まれの坪内逍遙や新渡戸稲造



寺田寅彦(1878~1935) 東京帝国大学物理学科を卒業後、ドイツ留学を経て東大教授。X線によって結晶構造を解析し、物質構造を究明する先駆的な研究を行った世界的な物理学者。科学と文学の精神を調和させ、多くの随筆・俳句を発表した。より20年近く遅い、明治11年(1878年)の生まれである。明治維新直後の激動期とあって、前述の2人との20年近い時間差は、外国語を含めて青少年期における教育環境の大きな違いとなって現れたことであろう。しかし、先生のまだ若い時代からの素晴らしい英語表現力は、教育環境の整備くらいで単純に説明できるものではない。(もっと時代が進み現代に至っても、日本に住み続けたまま、先生ほどに闊達な英語を駆使して事物や現象を自由に表現できる能力をもつ日本人は稀であろう。) いったい先生はどのようにしてその能力を培われたのであろうか。当然な疑問が浮かんでくる。

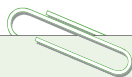
もちろん先生の語学的天性が第一の理由であろう。司馬遼太郎の「胡蝶の夢」という幕末から維新直後の医学を扱った作品の中に、佐渡出身で〈伊之助〉のちに司馬凌海と呼ばれる人物がオランダ語やドイツ語の習得に驚異的能力を発揮したことが記されている。また9世紀はじめに僧空海が入唐した直後、日本側の官吏に懇望されて唐の官吏に提出した上奏文が、長安の知識人を驚倒させるほど巧みな漢文で、これで待遇が一変したというような話も伝わっている。先生にはこれらの天才にもなぞらえられるほどの能力が備わっていたのではないだろうか。しかし、語学の習得には天賦の才能だけでなく、本人の意志や周囲の環境が大切な要因となる。太田文平氏の「寺田寅彦」によると、先生は高知中学時代からアーヴィングの「スケッチ・ブック」やユーゴーの「レ・ミゼラブル」の英語抄訳本を読んだり、英字

新聞を購読したりしたというから、旧制中学生レベルで見ても恐ろしく早熟だったことは確かである。先生の英語力に関しては熊本の第五高等学校時代における夏目漱石の影響を挙げる人もいるようだが、筆者の旧制高校時代の経験からいって、あまり信じがたい。漱石の影響は、むしろ俳句など文学的世界への開眼にあったと思われる。

筆者の疑問については、やはり太田氏の「寺田寅彦」がある程度まで解答してくれた。先生がご自身で書かれた「吾が中学時代の勉強法」「読書の今昔」「蓑田先生」などの文章が下敷きになっていて、英語に限っていえば、高知中学校入学前後においては山本楠弥太、3年生以後は蓑田政孝という人物の影響が大きかったらしいことを知った。とくに蓑田という当時若かった英語教師は、「子供の時分にアメリカへ行って、それから十何年の間ずっとあちらで育ち、シカゴの大学で修学して帰朝するとすぐに、この南海の田舎へ赴任してきた（蓑田先生）」ということであるから、当時としては珍しいナマの英語を中学生たちに教えたことであろう。この蓑田という先生は一般の生徒からは敬遠されがちだったらしいが、寺田先生はその下宿先を訪問するなど積極的

に接近されていたそうである。

英語には限らないが、語学習得の初期の段階でナマの言葉に接する経験は、言葉として何が自然かを体得する上で貴重に思える。筆者個人の経験を述べさせていただくと、太平洋戦争が勃発する直前、筆者のいた旧制中学校に日米交換船でアメリカから帰国してきた2人の二世が入学してきた。彼らと終戦まで4年近い年月を共に過ごすことにより、普通の英語教師からはなかなか伝わってこない、英語らしさとは何かということを多少は感じとれたような気がする。また、中学3年生のとき寺田先生と同様に、英文でコナン・ドイルの「シャーロック・ホームズ」シリーズを夢中になって読みふけた経験も無駄ではなかったと思っている。筆者は東京大学に在職中、「科学英文技法」という大学院生向けの講義を担当させられ、その結果として同じ題名の本を書いたりしたため、自分がeducated nativeと同程度に書けるなどという大それた自信があるわけでもないのに、何となく私たち日本人の書く英文が気にかかるという因果な性分になってしまった。そんな筆者が試みた今回の非礼を、最後に地下の寺田先生の霊にお赦し願うことにする。



筆者の兵藤先生は、東京大学工学部教授であった今から20数年前に、啓林館「中学理科」「高校物理」教科書の著者として参画されました。「教科書を執筆するからには、子どもの実態を知ろうと思い、私の娘が通っている中学校に頼んで、電気の授業を見てきました。理科の先生は、相当に緊張されていました。と、いつもの少しはにかんだ笑顔をたたえて物静かに言われました。子どもの実態を把握した上で教科書執筆に取り組もうとするこの姿勢は、実証性を大切にして真理・真実を限りなく追究した寅彦の孫弟子としての面目如何です。「開かれた学校」として、今日では授業参観はごく普通に行われてはいますが、当時、保護者とはいえ、我が国の物理学界を代表する東京大学の教授が、中学校の電気の授業を参観するということですから、学校や理科の先生の戸惑いと緊張はいかばかりであったでしょう。

なお、この稿は、寺田寅彦を研究する会報「^{かしわ}」（「寺田寅彦記念館友の会」高知市小津町4-5）からの転載です。寅彦が幼少時代を過ごした旧邸は、「寺田寅彦記念館」として高知市内に復元されましたが、その庭には、随筆『庭の追憶』に出てくるカシワの大木があり、「^{かしわ}」の命名はそれに因んでいます。

（岡村記）